参考館企画展「栃木拾遺物語」

中村耕作・髙垣美菜子

はじめに

國學院大學栃木学園参考館では、本学学芸員課程との共催、栃木市教育委員会の後援のもと、二〇一五年一〇月三一日から二〇一六年一月三〇日にかけて、企画展「栃木拾遺物語～栃木に生きた先人たちの歴史を探る～」を開催した。本展は同年度春セメスターの開講科目「博物館実習Ⅲ」（中村担当）の一環として実施したものである。本展は、開催に至る経緯を含め、栃木市教育委員会との協力関係にもとづく企画である。

一、開催に至る経緯

二〇一〇年、栃木市は大平町・藤岡町・都賀町と合併し、市域を拡大したが、これを機に、遺跡詳細分布調査が計画された。引き続き合併した西方町（二〇一二年）、岩舟町（二〇一四年）を含め、既に調査が行われていた旧栃木市と旧藤岡町を除く全域を調査対象とし、二〇一一年度～二〇一四年度の四カ年で実施された。この調査において、栃木市教育委員会の依頼のもと、國學院大學栃木短期大学日本史フィールドの教員・学生を中心に、國學院大學学生・院生・卒業生（本

学出身者を含む）計九四名が参加して、古墳および城郭を除く対象範囲の遺跡踏査を実施した。畑地などの場合、地下の土器・石器などの小破片が降雨や耕作などによって地表面に浮き上がってくる。宅地・水田・山地を除く、一定範囲内の道路際や畦などを網羅的に歩いてそれらを採集し、遺跡の時期・範囲・内容を推定するのが詳細分布調査である。こうした情報を蓄積することで、ある土地を大きく開発しようとする際に地下に遺跡（行政用語で埋蔵文化財包蔵地）が埋まっているかを事前に把握することが可能となる。遺跡は出来る限り避けることが望ましいので、こうした遺跡の所在を確認するための分布調査は文化財保護の第一歩となる。その成果は、別途調査された古墳・城郭とともに、市教育委員会事務局による編集を経て、二〇一五年三月に報告書として刊行された（栃木市教育委員会編『栃木市遺跡分布地図』）。合併前に五三四箇所が登録されていた埋蔵文化財包蔵地（栃木県教育委員会編『栃木県埋蔵文化財地図』一九九七年）は、七四七箇所となるなど大きな成果を得た。

この報告書は包蔵地範囲を示した地図と地番・立地・主要な採集遺物などを示した地名表および、主要な城郭縄張図からなる。しかし、採集品にはこれまで知られていない重要な資料も見られることから、当初調査の指揮をとった小林青樹（元本学教授）によって、その調査成果の有効活用が課題として指摘されていた。

そこで、二〇一五年度の「博物館実習Ⅲ」における展示実習の素材としてこれを活用し、栃木市の文化遺産を紹介するとともに、遺跡の事前把握という文化財保護に関わる栃木市や本学の取り組みを紹介することとした。

二、展示構成とその準備

グループの編成

以上の基本コンセプトは中村が予め決定し、学生はこれに沿った展示資料の選択、調書の作成、説明文の執筆、資料・説明札の展示を担当した。受講生は考古学のほか古代史～近代史および西洋史の各専攻生から成っており、可能な限り専攻する時代の遺物を取り扱うこととした。結果、縄文時代、古墳時代、古代、中

世、近世～近現代の五グループを編成し、各三点程度を取り上げることとした。なお、受講生二三名のうち、前年度に実施した分布調査に三名が参加している。

展示資料

分布調査について：展示趣旨、調査地図原図、ラベル、報告書（教員担当）

縄文時代：縄文土器（西方町向宿遺跡）、分銅形打製石斧（西方町木ノ宮遺跡）

古墳時代：円筒埴輪（大平町七廻り鏡塚古墳群）、土師器高杯（岩舟町甲塚古墳）

古代：土師皿・平瓦（岩舟町村檜神社・大慈寺周辺）

中世：板碑（都賀町内）

近世・近現代：かわらけ・灯明皿（都賀町華厳寺跡）、桟瓦（都賀町）、中皿（大平町）

前述のように、当初は、これまで知られていない考古学的・地域史的に重要な資料を紹介する心づもりであったが、実際にはそれらは小破片であり、その意義を十分に周知しえない可能性があったため、結果的には形状がよく残る各時代の標準的なもの（打製石斧、瓦など）や、著名な古墳・社寺に関わるもの（七廻り鏡塚古墳群、村檜神社、大慈寺、華厳寺跡など）、などが選ばれることとなり、学生にとっては基礎知識の確認や栃木の地域史を学ぶ機会となった。

企画展ポスター

タイトルとポスター

こうした各グループによる資料調査と並行し、展示全体をカバーする展示タイトル案とポスター原案を学生が企画し、前者については投票で絞られた案をもとに決定した。後者はデザイン案から教員が選択し、イラストを得意とする学生が清書を担当した。

展示作業

参考館展示室における実物および説明札の展示作業は、補講期間を利用し一日をかけて実施した。

展示風景

前年度の実習展示は壁面でのパネル展示のみであったが、今回は実物を伴うため、常設展示冒頭の一角を撤去してスペースを確保した。覗きケース三個、ハイケース一個である。なお、二〇一六年度は常設展示構成を大幅に変更し、企画展用のケースを確保している。

個々の資料は演示台に乗せ、テグスで固定し、統一デザインの説明札を置くもので、小形資料の固定を除けばスムースに進行した。

展示公開

夏季休暇明けに教員担当箇所である展示コンセプトパネルと調査に関わる原図類の展示を終え、学園祭に合わせて会期をスタートした。期間中は調査に参加した卒業生なども見学に訪れ好評を得た。

三、課題と展望

國學院大學栃木短期大学と栃木市は二〇一六年三月に包括的な連携協定を締結した。これまでの分野ごとの連携をふまえ、一層の協力関係を築くことが目的である。日本史フィールドによる栃木地域の文化財調査はこれまでにも多くの実績を重ねており、本展の契機

となった分布調査への参加・協力もその一環として、地域貢献と実地での学習に効果を上げてきた。しかしながら、その成果が広く一般市民へ周知・還元されることは、教員による公開講座を除けば少なかった。学部の専門教育課程と学芸員課程が分離せざるを得ない大規模校と異なり、本学のような小規模校は、専門教育課程や課外での各種調査プロジェクトと博物館学スタッフ・受講生はほぼ重なるため、調査から一般公開まで一貫したプログラムを組みやすいという利点がある。そうした点で、分布調査の意義と成果を伝える本展はその一歩となるべきものであったが、結果的にはそこまでの成果は得られていない。

具体的課題の一つは、期間中に学生が関与する機会を得られなかったことである。本来、展示解説・ミュージアムトークなどの形で来館者と直接対話する機会を設けることが大きな実習となる。二つ目は栃木市その他の外部機関との連携である。本展は、栃木市の施策の紹介という面もあった。また、大慈寺での採集資料を扱うなど、市内各所との共同事業もあり得たテーマであった。展示内容を充実させ、各方面との共同事業を企画することで、積極的に来館者・参加者を得る工夫を考えたい。

最後になったが、本展の開催ならびに分布調査資料の利用に関し、栃木市教育委員会より格別の配慮をいただいたことを明記し感謝したい。